

*** 今日の健康（9月）***

< 死因としての認知症 >

アルツハイマー型認知症は物忘れとしての認識が広まっていますが、病気の進行により死亡の原因となることもあります。

徐々に進行し寝たきりになることがあるアルツハイマー型認知症は、脳に「アミロイドβ」、「タウ」という蛋白質が蓄積して、神経ネットワークに障害が発生して発症します。

アミロイドβがたまり始めてから20年ほどで、認知症の前段階の軽度認知障害(MCI)になり、軽い物忘れが見られるようになりますが、生活には大きな支障はないレベルで、この状態は5年ほど続きます。

進行すると記憶力が低下し、時間が分からなくなるなどの症状が現れ、買い物や料理、掃除などの家事を段取りよく行うことが難しくなって初期（軽度）のアルツハイマー型認知症と診断されることが多いです。

さらに進んで中期（中等度）になると、自分がどこにいるかが分からなくなったり、ほんの数秒前のことを忘れてしまったりする。物を盗られたという妄想や徘徊などが起きることもあり、着替えや入浴といった身の回りのことをするのに手助けが必要になります。

進行期（重度）になると、家族や親しい人の顔が分からなくなったりします。

終末期には、体の動きをつかさどる脳領域にまで病変が広がり、手足を動かすことができなくなって寝たきりになり、そのため全身の機能が低下し循環器・呼吸器疾患などを起こしやすくなります。ものを飲み込む力も弱くなるために飲食物やだ液が気管に入って誤嚥性肺炎で亡くなることが多く、ここまでかかる期間は初期の症状が表れてから10～15年ほどです。



老衰や誤嚥性肺炎の原因が認知症のことも

日本では認知症に対する偏見などもあり、これまでは医師が遺族に配慮して、「老衰」や「誤嚥性肺炎」を死因として死亡診断書に記載することが多く見受けられましたが、近年はそうした場合に死因を「アルツハイマー型認知症」とすることが少しずつ増えてきて、2016年の統計で女性の死因の第10位に入りました。それでもなお「死因を肺炎としている中に、実際にはこれらの原因がアルツハイマー型認知症であることがかなり含まれるのではないか」と、専門家の間では見られています。

アルツハイマー型認知症はゆっくりと進むので、過度に恐れる必要はなく、いつか死が訪れるということを患者や家族が理解していれば、終末期にどのような医療を受けて、どう過ごすかを話し合っておくことができます。

記事紹介：群馬大名誉教授の山口晴保・認知症介護研究・研修東京センター長

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏